

内的体験としての「思考」の志向性について：

小川氏への返答

鬼界 彰夫

I.

小川氏の論文「重制度としての志向性 『ウィトゲンシュタインはこう考えた』をもとに」は、拙著『ウィトゲンシュタインはこう考えた』第四部9に示された（私の解釈に基づく）「意図」、「意味」に関するウィトゲンシュタインの考えを、心的諸概念に関する分析哲学的な考察という視点から評価・批判しようとする試みである。拙著がこれらの概念に対するウィトゲンシュタインの理解を「志向性」という伝統的な哲学的問題と結び付けて論じたことを受けて小川氏は、ウィトゲンシュタイン的見解を、それが志向性を巡る哲学的問題の解決にどれだけ寄与しているかという観点から評価しようとしている。そして意図と意味を持つ物的表象の志向性の問題（その不思議さ）については、それが重制度であるという拙著の理解によって基本的には解決されていると評価する。この「重制度」とは、それに対応する自然的過程が我々の中に存在しないような慣習・制度であり、この意味で人間の各文化・言語による色の区別は制度ではあっても重制度ではない¹。それに対して語の意味（指示対象）や行為の意図（過去の行為の意図を含む）は、直接それに対応する生理的過程が生物としての人間に元々備わっているわけではないので、貨幣制度と同様に、重制度であり、その同一性は人間同士の慣習・取り決めに依存する。これが、意図や意味が「その状況の中に、人間の慣習・制度の中に埋め込まれている」というウィトゲンシュタインの言葉の意味することである。

志向性という現象の「不思議さ」（例えば、なぜ単なる音が意味を持ったりするのか、という感覚）をその重制度性によって説明するこうした考え（ある現象が重制度的なのに、そのことを忘れて独立した現象と見なそうとするがゆえにそれが不思議に思えるのだ、という説明）をウィトゲンシュタイン的理解と呼ぼう。小川氏の問題提起とは、我々の思考が持つ志向性（を巡る不思議さの感覚）はこうした理解によっては十分に説明されないのではないか、というものである。ある時点である人間がどの

ような意図を持っているかは、その人間を取り巻く状況と、その前後の言動から判断されることであり、その時点で当人がどのような思考をしているかという心的体験によるのではない。例えば遅刻の言い訳を考えながら会議室に急ぐ人間は、「会議室に行こう」と意識的に考えていなくても、会議室に行く意図を持っていると我々は判断する。これが、意図が「状況に埋め込まれている」ということに他ならない。それに対してある時点である人間が何について考えているかは、その人間を取り囲む状況や、その前後のその人間の言動によって決まるのではない。それはその時点でその人間がどのような心的経験をしているかによって決まるのであり、それを知る簡単で適切な方法は、「何について考えているの？」と当人に訊ねることである。このように思考は重制度ではない。では「チャーハンが食べたいな」と思うとき、我々の思考はどのようにしてチャーハンという対象と結び付けられているのか、チャーハンという対象とは独立した思考という内的体験がどのようにしてそれと必然的な関係（「についての思考」という関係）を持つのか、これが小川氏の問いかけである。

この問いかけを小川氏は二つの形で行っている。すなわち、この問題に対するウィトゲンシュタインの答えはどのようなものか、という問いかけと、この問題に対する哲学的に正しい答えは何か、という問いかけである²。この小川氏の問いかけに対して私は、思考の志向性が不思議な現象だと思う人（あるいは我々がそのように思う機会）に対して語るべきだと私に思われることを語ることによって答えたい。それが哲学的に正しい答えかどうかの判断は小川氏および読者に委ねたい。そしてそれが、この問題に対するウィトゲンシュタイン自身の答え（それがテキスト内に記されているとして）と一致するかどうかは、私の今後の『探究』研究を通じて明らかになればと思う。

II.

意図の志向性が、その重制度性を想起することにより不思議なものではなくなるのに対して、思考の志向性がそうでないとすれば、その理由は意図に比べて思考がより強い自然的土台を持っているからだと考えられる。すなわち、人間の慣習やとりきめには収まらない、より原初的で確固としたものがその中にあると我々が感じるために、その存在が謎めいて見えるのだと考えられる。それゆえ我々に見られる思考の志向性に類似の現象が、自然の中に、例えば我々人間に似た生き物の中に認められるな

ら、人間の思考の志向性に対する当惑感、なにがしか和らぐと考えられる。犬を例に考えてみよう。

あなたの愛犬が、散歩に行きたいときは首輪を咥えてあなたのもとに駆け寄り、訴えるような目つきで吠えるとしよう。そして空腹になると、皿を咥えてあなたのもとに駆け寄り、同じことをするとしよう。そのたびあなたは、散歩に連れて行ったり、ドッグフードを与えたりする。このような場合、犬が首輪を咥えて来れば、あなたは「散歩に行きたいんだな」と何の不思議もなく思うだろう、そして「散歩に行きたいと思っているんだな」と考えることもあるだろう。そのときあなたは、「これは本当はロボットのようなものだが、あたかも何かを思っているかのように私が扱っているだけなのだ」とは考えないだろう。つまりあなたは犬に「散歩に行きたい欲求」という意識的な内的状態を認めているのであり、そうした意識的な内的状態を「思考」と呼ぶかぎりにおいて「散歩に行きたい」という思考を認めているのである。この犬の内的状態としての「思考」は、「散歩（活動）」というそれ自身とは異なる対象と内的に結びついており、その意味で志向性を持っている。だから犬が首輪を咥えているのを見てあなたは、「散歩のことを考えているんだな」と思うのである。これが犬という、我々に似た自然的対象（生き物）に見られる志向性である。ただしそれは、「…がしたい欲求」という意識的な内的状態全体が持つ志向性である。これを原志向性と仮に呼ぼう。

犬のような我々に似た生き物が何かについて考えることに、すなわち、思考という内的状態をもつことについて、あなたが何の疑問も持たなければ、私の説明のこの部分はこれで終わるが、もしそれが不思議に思えるならば、生き物を巡る自然現象として、どのようにして原志向性が生まれるのかを考えることによって説明を補足しよう。原志向性を持つ内的状態とは欲求だけではなく、恐怖、喜び、怒り、等の動物が持つ情動は同様に原志向性を持ちうる。そしてそれらの情動は必ず外的に表出される、あるいは外的に表出される動物の内的状態を我々は情動と呼ぶのだ、と言ってもいい。そして生き物は徒に、あるいはそれ自身を目的として情動を表出するのではなく、普通は他の生き物（同種あるいは他種の）に向けて自分の情動を表出するのであり、それは表出された自分の情動を認知させることによって相手の行動に自分にとって有益な影響を与えるためである。このようにして生き物は、相手を威嚇したり、仲間に助けを求めたり、危険の警告をしたりする。こうした情動の表出を相互行為操作的情動表出³と呼ぼう。こうした相互行為操作的情動表出の中には、自分と相手以外

の第三の対象に相手の行動を関係付けようとするものがある。例えば天敵を認知したときの警戒感の表出は、その天敵からの逃避を仲間にうながすものである限りにおいて、天敵という第三の対象と仲間の行動を関係づけようとするものである。こうした場合表出される情動は、それ以外の対象と内的関係を持つものとして理解したときにのみ情動として有意味となるので（警戒感とは、何に對する警戒感かが分かった時にのみ、表出される相手にとって理解可能となる）、それとの関係を原志向性と呼ぶことができるだろう。こうした場合、表出される情動は、何かについての情動である。ここで重要なのは、我々に近い多くの生き物は、常にそれを行使しているとは限らないが、原志向性を持つ情動表出の能力を持っているということである。犬の例が示しているのは、環境によってそれが拡大するということである。

III.

もし我々人間に見られる思考の志向性が、こうした原志向性の直接の延長・拡張であったなら、思考の志向性を不思議に思うことは、我々が他の動物より多種で複雑な情動を持つことを不思議に思うことに等しく、哲学的に問題にするには値しないであろう。それが哲学的問題になるのは、我々の思考の志向性と動物の情動の原志向性の間にはある根本的相違があるからであり、この相違に対する我々の原初的な認知的反応が「不思議さ」の感覚なのだと思われる。それゆえ、その相違を自覚的に認識することにより、あるいは、想起することにより、我々の哲学的問題は消滅するように思われる。

その相違とは、原志向性において志向性を持つのが、相手に対して表出される内的状態としての情動全体であるのに対して、人間の思考の志向性において何より志向性を持つのは思考に含まれる言葉や心像であり、思考全体は、それを構成する言葉や像の志向性に由来する限りでの志向性を持つ、ということである。チャーハンを食べたいと思うとき、我々はチャーハンについて考えている。しかしこの関係は、チャーハンを食べたい、という思考が全体としてチャーハンという対象と持っている関係⁴ではなく、この思考を構成する「チャーハン」という言葉がチャーハンという対象と持っている関係（志向性）であり、思考の志向性はその構成部分の志向性に由来するのである⁵。我々は、チャーハンを食べたい、ということもできれば、昨日のチャーハンは美味かった、ということもできる。さらに、明日はチャーハンでないものが食べ

たい、ということもできれば、どこのチャーハンが美味いんだ、ということもできる。これらの思考はすべてチャーハンに関するものだが、それはそこで表現されている様々な情動・状態（欲求、記憶、期待、疑問）のそれぞれが、犬の場合のように、状態全体としてチャーハンという対象とある関係を持っている（例えば、チャーハンを食べるとそれが消滅する、といった）からではなく、それらの思考が「チャーハン」という言葉から組み立てられているからであり、それらの思考に含まれている「チャーハン」という言葉がチャーハンという対象と特別な関係、すなわちチャーハンを意味するという関係にあるからである。そして「チャーハン」という言葉がこうした意味で志向性を持っているのは（＝チャーハンを意味するのは）、「チャーハン」という言葉が日本語という制度・慣習に基づいた知識の一部をなして、我々がその知識に母語として習熟しているからである。こうした意味において、我々人間の思考の志向性は言語（母語）という制度的知識に由来する志向性に本質的に依存しており、その意味で制度依存的なのである。我々のこうした思考が単なる記号の集積としてではなく、何かを意味する志向性を帯びたものとして体験される⁶のは、我々が母語に習熟しているということに他ならない。すなわちそうした記号を、チャーハンなどの諸対象と諸人物と様々な仕方と結びつける複雑な技法（例えば、チャーハンが食べたければラーメン店に行き、店の人に「チャーハン」と言う、等）に我々が習熟しているからである。そうした習熟の結果、我々は有意義な体験として、チャーハンが食べたいな、と思えるようになったのである。そうした習熟の歴史を忘却するとき、思考の志向性は不思議なものとして我々に立ち現れるだろう。制度・慣習への習熟は、自己の習熟の過程を我々に忘れさせ、そのことにより、制度の制度性を忘却させるのである。

こうした人間の思考の志向性の特性は、他の動物の側から見れば、犬は散歩に行きたいとは思えても、食後に散歩に行きたいとか、明日は散歩に行きたくない、とは思えないということの内に現れている⁷。原志向性とはあくまでも、相手の行動に何らかの影響を与えようとして、その相手に表出する情動全体のみが持ちうるものであり、そうした個々の表出行動から独立し、様々な表出行動と関与しうるような物（例えば、語）が存在し、志向性を持つに至るという回路は原志向性という概念の中には存在しないのである。原志向性とは、そのようなものとしてのみ我々に理解可能な概念なのである。

¹ 異なるものとして知覚される色の数が言語と文化に依存するという意味でそれは制度・慣習であるが、異なる色を知覚する生理的機構が我々に生物として備わっているという意味でそれは重制度ではない。

² 小川論文、p. 30.

³ それはJ.L.オースティンが発語媒介的行為(perlocutionary acts)と呼んだものの祖型であると考えることができる。

⁴ 思考全体がチャーハンと直接的な関係を持つことはある。チャーハンの匂いがして「チャーハンが食べたい」と思うときがそうである。しかし思考はこうした関係から独立である。我々は突然、チャーハンが食べたいと、思うことができる。

⁵ それゆえ言語の思考性を心的状態の思考性によって説明することは、我々の思考を混乱させる思考に立脚していると言わなければならない。

⁶ 小川論文、p. 29.

⁷ ウィトゲンシュタインの次の言葉は、明らかにこうした事態に関わるものである。

犬は飼い主が玄関にいると思う。だが飼い主が明後日に来ると思うことも犬にできるか？—そして、ここで犬にできないこととは何なのか？—それを私はどのようにして行うのか？—私はこの問いにどのように答えるべきなのか？(『哲学探究』旧第二部、(i)、拙訳)

(きかい・あきお 筑波大学人文社会系教授)